

## 聖淫紋に繋がってみよう

思春期は悩みが尽きない。親からの感慨深そうな口振りが頭を過る。

平凡、凡も凡である自分は特別賢いわけじゃないし他人を驚かせる特技も持ち合わせていない。せいぜい冬空を漂う複数の落ち葉を手刀で払う程度の誰でもできる暇潰しぐらいだ。

緑山童斗は小寒の下、真紅のマフラーにすっぽり口を埋めて身を縮ませる。とにかく寒

い。例年より気温の低下が著しいと天気予報で見たが、人間の限界値を越えているのではと疑う。芯まで凍えるとは、今日のために言い伝えられた言葉だろう。

早起き、試験勉強のち部活、また勉強。学生のルーティンであるが改めて考えてみても過酷である。散々頭を回転させて当校伝統のリレー競争だのなんだの身体に鞭を打たれ、やつと夕刻を回り解放されたと思えば、上級生から半ば脅迫めいた勧誘を受けてしぶしぶ入部した書道部に連行されるなど。

「……………」

行方不明になる感情。まだ小学校の時点では無邪気に野山を駆けていた記憶がある。

明確な転換期は高校受験から、出口の見えない闇を進んでしまった。

からからな空気が喉に刺さりながら歩幅を早める。帰宅したら、間髪入れず暖房の風に包まれながら眠りたい。

横断歩道に差し掛かり、信号を確認する。喧騒が苦手な竜斗は、車の走る音に耳を塞ぎながら安全に渡った。

「竜斗くん」

不意に背中を小突かれて体勢を崩しかける。何とか持ち直して転倒せずにいられた。

声の主は申し訳なさそうな、表情には見えなかった。無愛想。むしろ、むっとしたような印象。

「竜斗くん、約束を交わしておいて無断で帰ってしまうなんて薄情ですね」

「約束……否応なしに取り付ける方が薄っぺらいだろ」

睨む竜斗。超然と瞬きする女。

青信号がちかちかと点滅し始め、ぞろぞろと列をなした車群が大移動を開始した。エンジンの鬱陶しい高鳴りは竜斗の腹や鼓膜を震わせる。

「それに、信号を見て。渡っちゃダメですよ」

無感情ながら僅かに語気が強まる。生真面目な性格なのは悪い事じゃないが、いちいち注意されると癪に障る。

竜斗は溜め息を吐く。当然、嫌味のつもりでわざとらしく。

「別に赤で渡ってないだろ」

「いいえ、点滅時に。ここの歩道は点滅が異様に長いことで有名ですから、点滅したら冷静に立ち止まりましょう」

「みんな切り替わりのタイミングぐらい渡るだろ、ねちねちとうるさい」

悪態をつくとき、途端に女は距離を詰めてきた。

あまり太らない体質のモヤシ体型で無駄に長身。竜斗との差は二十そこそこで大人と子供の差だった。

屈んだ姿勢で見下ろす女は、竜斗の両肩を掴んで顔面を急接近させる。別に見ず知らずの間柄というわけじゃないが、だからといって気を許し合う仲とは違う。少なくとも竜斗は『放課後一緒に帰るのを拒否』している。

「どうして怒っているのですか？」

ふわりと、シャンプーの香りが鼻腔をくすぐった。近場の洗髪コーナーで売ってそうな、極ありふれた市販品では嗅いだ事のない香り。高保湿の高級品だろうか。

髪一本一本がきめ細かく艶やかな漆黒の長髪が、微風にそよぐ。

「高校に入学して以降、どこか人が変化したと言いますか。悩みがあるなら相談してください」

黒長髪から滴る精液の雨は、雌臭い豊満な身体を汚ならしく彩る。鎖帷子を侵食して地肌まで到達した精子がびちびちと一心不乱に尻尾を振り乱し、おまけに肉付きの良い太ももを経由して最も淫靡な部分に接した褌にも襲いかかった。

凶魔の精液を浴びた雌は、肌に付着した精子から中毒症状を引き起こす強力な媚薬を注入される。一度精子に魅せられれば己の意思と関係なく凶魔の遺伝子を欲するようになり、たちまち魔に従う公衆雌便器へと変貌する。

「——っ」

竜斗は愕然とした。大仰に負け筋だなんて言ってみたが、既に、雌雄は決していたのだ。視線の先に正座した女が佇む。平然と、悔しがる素振りすらなく、できるだけの量を摘み取った精液を両手になみなみ掬する。

「肉眼で捉えられるほどに肥大化した子種……尿道を通る際の悶絶っぷりは大袈裟ではなかったわけですか。同情します。それはさておき、肌や内臓に侵入させて媚薬か何かを打ち込む算段でしたが、残念。『聖術』の真髓をお見せいたしましたしょう……」

真っ直ぐこちらを凝視しながら、どっぷり両手にのしかかる精液の溜池に口を寄せた。

「鼻が曲がってしまいそうな魔と人間のくっさい遺伝子ブレンドザーメン、慎んで胃に収めさせていただきます。……ふ、凄く熱い。人間の子種における適温は二十度、精巣による

徐々に蘇る、凶魔の洗脳時の記憶。強制的に快楽物質を投与することで性感帯改造による痛覚を抑制されていた。危険な中毒性を孕む物質は戦闘員が誰彼構わず性暴力を起こす要因になったが、鑑みれば自分は被害が少ない部類だったのだと、薄れゆく意識のなか竜斗は悪運の強さを感じる。

「ぶぽぽぽ♡♡ ぐっちゅぶっちゅ♡♡ ぐりぐりぐりぐり……ん、小腸の印を解呪。ご存知でしゅか、小腸は摂取した食物を消化してたっぷり時間をかけて栄養素を吸収していくのでしゅ。水分を吸収された老廃物は……聞こえていましえんか。気絶して身体が倒れてしまわぬように予め術をかけておいて助かりました」

蜜輝の声が反響して聞こえる。半ば意識を手放しているものの状況は把握できた。

途切れ途切れだが、胃に気持ち悪さを覚えた。若干吐き気も伴うが、瞬きしてる間にそれも消失。十二指腸ら辺の治療も滞りなく完了したようだ。

「ぽりゅ!!♡♡ ぽりゅ!!♡♡ ぐろん♡♡ じゅぽおおおお……めりよお、めりよお……ブボボボボボ!!♡♡♡」

けたたましい卑音に人語は一切付随しない。もちろん初めから嫌がる素振りは無かったが、不気味なくらい淡々と汚物に舌を這わせて丁寧に、時に荒々しく舐め上げ、時にタコのように吸いつく。